

2015年ネパール大地震の被害が 震源地よりも遠方で大きくなった ことへの宗教的解釈 —世界の多様な災害現場における 宗教の重要性について—

竹下 正哲¹・キソル チャンドラ カナル²

The religious interpretation of the atypical damage
pattern of the 2015 Nepal earthquakes:
The significance of religion in a
diversity of world disasters

Masanori TAKESHITA¹ and Kishor Chandra KHANAL²

Abstract

The huge earthquake occurred on April 25th 2015 in Nepal. The peculiarity of this earthquake was the atypical damage pattern. The damage in the remote area was more serious than in the epicenter. The causes of this peculiarity will be analyzed sometime soon from a scientific view point, but a lot of local people in Nepal interpreted this phenomenon as the message from gods. While in secular countries like Japan, this kind of religious interpretation tend to be ignored as an unscientific idea, in religious counties like Nepal, religion sometimes hold considerable influence over governmental policies. It is, therefore, important for international relief agencies to know the religious interpretation for this earthquake in order to avoid unnecessary conflict with local partners. Thus the objective of this paper is to report the local religious viewpoint and analyze it.

キーワード：ネパール地震, 宗教, シンドゥパルチョク, ゴルカ, タマン族, チェパン族

Key words: Nepal earthquake, religion, Sindhupalchok, Gorkha, Tamang, Chepang

¹ 拓殖大学国際学部
Faculty of International Studies, Takushoku University

² 愛知県立大学多文化共生研究所
Cultural Symbiosis Research Institute, Aichi Prefectural
University

本報告に対する討議は平成 29 年 8 月末日まで受け付ける。

1. はじめに

2015年4月25日および5月12日にネパールで死者8,702人、負傷者22,493人（UNHCR 2015, 2015年6月3日時点）をもたらす大地震が発生した。この地震のユニークな特徴は、震源地域での被害よりも、そこから150 kmほど離れた遠方で被害が最大になっている点にある。その理由については、今後地質や地形、建物、ソーシャル・キャピタルなどの視点から解明されていくと思われるが、現地ネパールでは、それら学術的な視点とはまったく違う宗教的な解釈を口にしていく人が数多くいた。すなわち「今回の地震は単なる自然現象ではなく、神の意志が働いている」という解釈である。

もちろん日本では、そのような宗教的な話は一笑に付され、学術的な議論の場にのぼることはまずあり得ないのだが、ネパールでは多くの学識者が真剣にそのことについて議論を交わしていた。というのも、ネパールは日本と違い、宗教が生活の隅々にまでいきわたっており、事実上は宗教国家ともいってよい状況にあるためだ。首都カトマンズだけでも2,700を超える祭祀施設があり（U.S. Department of State 2011）、教育から、政治、文化、経済にいたるまで、あらゆる活動が宗教（とくにヒンドゥー教）と分かれがたく結びついている。カースト制度は未だ健在であり、職業の多くもカーストの影響を強く受けている。たとえば高いカーストの人たちは、低いカーストの人たちが作った料理を食べようとはしないので、レストランの料理人は自然と高いカーストの人が多くなっている。このように、ネパールでは宗教が生活のあらゆる場面に浸透しているため、当然地震についても、神のお告げと捉えても不思議ではない。ただ不気味ともいえる点は、それらの宗教的解釈が「なぜ震源地よりも遠方で被害が多く出たのか」という現象を、ある程度うまく説明してしまっていることにある。少なくとも被害の数値は、「神のお告げ」を支持しているように見える。

本論では、それら宗教的解釈を解説していくが、それが正しいのか間違っているのかを議論することを目的とはしていない。そうではなく、それら

現地の宗教観を日本に報告することで、今後日本がネパールの復興支援をしていく際に、無用なトラブルや衝突を避けられるようになることを目指している。日本人はつい忘れがちであるが、世界の多様性の中にあっても、宗教も災害対策にとって欠かすことのできない要素の一つに数えられるべきであろう。本論が現地をより深く理解するための一助となってくれることを願っている。

2. ネパール大地震、死者数の状況

現地の宗教的解釈を理解するためには、今回の地震がどのような被害をもたらしたのかを、地域レベルで詳細に把握する必要がある。大地震は4月25日の現地時間午前11時56分（UTC+5:15）に発生した。震源地はゴルカ郡でマグニチュードは7.8だった（図1）。震源地付近の揺れは相当なもので、多くの建物が軒並み崩壊し、土砂崩れも多数起きた。5か月後の9月に我々が訪問した際にも、いまだに多くの家屋が完全に倒壊したままの状態であり、住民らは仮設テントで暮らしている状態であった（図2、3）。現地ゴルカ郡の住民にインタビューをしたところ、地震発生時は「揺れがひどくてとても立っていらなかった」という。また建物は「85%が倒壊した」とも言っていた。にもかかわらず、ゴルカ郡の死者数は443人とそれほど多くはない（表1）。

死者が一番多く出たのはシンドゥパルチョク郡で、首都カトマンズ（死者1,222人）の3倍近い3,440人が亡くなっている。その原因としては、5月12日に最大の余震（M7.3）がこの地域で発生したことが挙げられるが、報道によると、5月7日時点ですでに3,057人が死んでいるとされている（OSOCC 2015）ので、その最大余震の前に既に多くの人が亡くなっていた計算になる。ただ5月12日以前にも、M6.7を含む余震がシンドゥパルチョク地域で頻繁に起きていたので、それらの影響は当然大きいと推測される。

しかし、それら余震を考慮したとしても、シンドゥパルチョク郡の死者数は突出している。それは人口比率から見ても明らかで、たとえばカトマンズは総人口1,744,240人に対し、1,222人が死んで

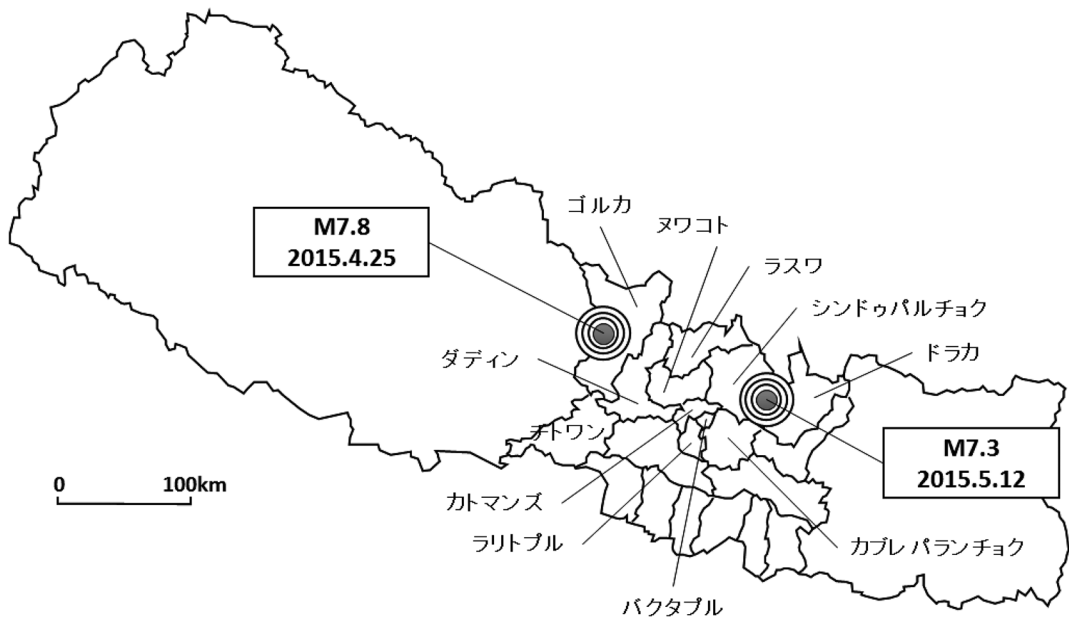


図1 ネパールの行政区と震源地 (UNHCR 2015を参考に筆者が作成)



図2 ゴルカ地域の壊れた家 (筆者撮影)

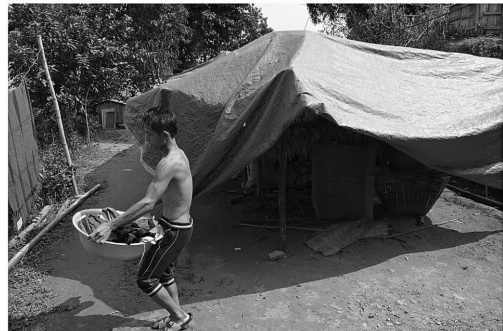


図3 ゴルカ地域の仮設テント (筆者撮影)

いる (全人口の0.07%) が、シンドゥパルチョクはその17倍の1.2%が死んでいる。震源地ゴルカ郡と比べてみても、シンドゥパルチョク郡は死者数で7.7倍、死者／全人口割合で7.5倍とはるかに高い数値となっている。

我々が9月に訪問したときの印象では、シンドゥパルチョクもゴルカ同様多くの家屋が完全に倒壊していた (図4)。ただ住民の話では、地震発生時、揺れはひどかったものの、立っていられないほどではなかったという。にもかかわらず、

多くの人が亡くなっている。死因としては、倒壊した家の下敷きになったというものが一番多いようであった。

表1をつぶさに見ていくと、シンドゥパルチョク郡の西隣のラスワ郡にも多くの死者が出ていることに気づく。ラスワ郡の死者数自体は597人と特別多いわけではなく目立たないのだが、死者／全人口割合で見ると、1.38%と最も高く、カトマンズの20倍近くにもなっている。また死者数では、ヌワコト郡がシンドゥパルチョク郡、カ

表1 行政区ごとの被害状況

行政区	死者(人)	負傷者(人)	全人口(人)	人口密度(人/km ²)	死者/人口(%)
カトマンズ郡	1,222	7,864	1,744,240	4,416	0.07
シンドゥパルチョク郡	3,440	1,571	287,798	113	1.20
ラリトプル郡	174	3,052	468,132	1,216	0.04
バクタプル郡	333	2,101	304,651	2,560	0.11
ヌワコト郡	1,086	1,052	277,471	248	0.39
ダディン郡	733	1,278	336,067	174	0.22
カブレパランチョク郡	318	1,179	381,937	274	0.08
ゴルカ郡	443	952	271,061	75	0.16
ラスワ郡	597	771	43,300	28	1.38
ドラカ郡	170	662	186,557	85	0.09

(死者、負傷者数：UNHCR 2015、全人口、人口密度：Population Monograph of Nepal 2014より作成)



図4 シンドゥパルチョク地域の壊れた家(筆者撮影)

トマンズ郡に次いで1,000人を超える大きな値となっている。またそれらに次いで、ダディン郡も死者/全人口割合が0.22%と震源地ゴルカ郡よりも大きな値となっている。

以上、死者数の状況をまとめると、震源地であったゴルカ郡では死者数がそれほど多くないのに対し、シンドゥパルチョク郡、ラスワ郡、ヌワコト郡、ダディン郡で多くの死者が出ている。首都カトマンズはもっとも人口が多く、建物も密集しているの、大きな被害が予想されたのだが、実際の死者数はそれほど多くなかった。日本のメディア報道では、さかんにカトマンズの被害映像が流されていたが、実際の現場の状況を見ると、確かにニュースにあったように寺院などの文化遺産はたくさん壊れていたが、人々の家はそれほど壊れていないのが印象的であった。カトマンズ住人の

話では、「建物の9割は無事だった。それは、あの揺れの中では奇跡だった」ということであった。

3. なぜゴルカの死者は少なく、シンドゥパルチョクは多いのか

これらの死者数の偏りに対する現地の宗教的解釈は、一言でまとめると、「宗教が乱れている地域でたくさん死んだ。戒律を守らない者に、神の罰が下された」というものであった。この場合の神とは、ヒンドゥー教の神ということになる。

ネパールは全人口の81%をヒンドゥー教徒が占めており(Population Monograph of Nepal 2014)、19世紀以降、ヒンドゥー教は正式な国教と定められてきた。2006年に議会によって非宗教国家が宣言されてからは、政治的には世俗国家となったが、人々の心にはいまだ宗教国家の価値観が色濃く残っている。仏教も古くから信仰されており、国民の9%が仏教徒となっている。ネパールでは、ヒンドゥー教と仏教は非常に近い関係にあり、ヒンドゥー教徒たちの見方では、自分たちの神ヴィシュヌが24番目に化身した姿が仏陀であると考えている。このような理由から、国民の9割以上の人たちは、「ネパールとはヒンドゥー教と仏教の国」という認識している状況にある。それがシンドゥパルチョク地域などでは急速に乱れているということであった。

宗教の乱れとは、具体的な例としては、たとえば牛を食べるようになってしまったということが

挙げられる。ヒンドゥー教では牛は聖なる神であり、それを食べることは許されていない。ところが、近年牛を殺して食べる人が増えてきており、そのような神を冒す行為が、今回の地震の原因だとされている。日本人にとっては、牛を食べたせいで地震が起こるなどという考え方は、あまりに非科学的と映るかもしれないが、ヒンドゥー教徒にとっては、それは真剣な議論に値する問題であり、その証拠に同じくヒンドゥー教徒が約8割を占める隣国インド（外務省 2016）では、多くの新聞が「ネパールで大地震が起きたのは、インド国民会議のリーダー、ラーフル・ガンディーが牛の肉を食べたせいだ」と報道している（ex. Plis 2015, Carvalho 2015, Munchies 2015）。その報道が正しいか間違っているかはここでは問題ではなく、牛を食べるといふ行為がヒンドゥー教徒にとってはどれだけ重大なタブーであるかということをよく示している。インドと違いネパールにはある種の報道規制があり、宗教に関するメディア報道が禁止されているので、そのような報道記事を見つけることはできないのだが、人々が口にする地震の解釈とは、そのような宗教の乱れに関するものであった。

なぜシンドゥパルチョク地域などで牛を食べる人が増えたかという点、ヒンドゥー教や仏教を棄て、キリスト教に改宗した人が多くいるためとされている。ネパールではキリスト教は全国民の1.41%しかおらず、マイノリティと呼べる状況にある。それでも、キリスト教徒は着実にその数を増しており、1961年の統計では国全体で458人（全国民の0.00%）しかいなかったものが、1971年には2,541人（0.02%）、1981年には3,891人（0.03%）、1991年には31,280人（0.17%）、2001年には101,976人（0.45%）、2011年には375,699人（1.41%）と50年間で820倍にも急増している（Population Monograph of Nepal 2014）。そしてキリスト教徒は牛を食べることが多いため、ヒンドゥーの神が怒りの鉄槌をふるったのだ、と人々は考えていた。

住民の典型的な意見としては、以下のような証言が挙げられる。これは震源地ゴルカの住人（男性、50代、チェットリ・カースト）の言葉だが、

「ここでは1人だけ死んだ。300世帯（およそ1500人ほど）の中でたった1人だけ。なぜこんなにも助かったか分かるか？」と彼は少し興奮気味に話してくれた。「それは、地震が起きたのが、土曜日の昼だったからだ。夜中だったら、みんな家の中にいて、つぶされて死んでいた。同じ昼間でも、平日だったらみんなばらばらで、下敷きになった人を助け出すことはできなかった。昼だったから、みんな外にいた。土曜だったから、みんな近くにいた。互いに助けることができた。神が守ってくれたのだ。これは神のメッセージだ。よく考えてみる。ある村ではたくさん死んでいる。ある村ではまったく死んでいない。その理由を考えてほしい。たくさんの人が死んだ村は、どうしてなのか？それは、神を忘れたからだ。自分のことばかり考えるようになってしまったからだ。シンドゥパルチョクではたくさん牛を殺している。神に捧げる生け贄も、赤いニワトリと黒いニワトリしか駄目なのに、白いものを捧げるようになってしまっている。今回死んだのは、クリスチャンが多かった。神はヒンドゥー教徒と仏教徒を守ってくれた。これは、方向性を正しくしなさいという神からのメッセージだ」

このような意見を耳にする機会は実に多かった。別の住人（男性、40代、グルン族）はこうも言っていた。「普通地震というものは、震源地から同心円状に被害が広がるものだろう。だが、今回の地震は違う。まっすぐの直線だ。それは神の意思を表している」と。確かに地図上で見る限り、死者が多くでた地域は震源地のゴルカを飛び越えて、ヌワコト郡、ラスワ郡、シンドゥパルチョク郡と東にまっすぐ向かっていた。もちろんそれは、合理的に考えるならば、ヒマラヤから続く山岳地形がそのように西から東に走っていて、死者がほとんど出なかった震源地南はなだらかな平原になっており、その違いが崖崩れや家屋の倒壊に大きな影響を与えたのだろうと推測できる。だが、地元住民にとってはそのような合理的説明よりも、神からのメッセージという解釈の方が、説得力を持っているようであった。

またゴルカの人たちは、「地震が土曜の昼に起

きたから助かった」と述べているが、ネパールのキリスト教徒にとっては、皮肉なことに土曜日は礼拝の日であり、10：00から12：30を礼拝の時間にあてている教会が多かったという。そのため地震が起きた11：56には教会の中にいた人が多く、建物が崩れて被害が大きくなってしまった（Christianity Today 2015）。

4. 死者の偏りの合理的説明

上記のように、なぜ震源地よりも遠方で死者が多くなったのか、その理由を「神からのメッセージ」とする見方が広まっていたが、ここではそれは本当に宗教が原因なのか、もっとより合理的な説明ができるのではないかと、ということについて若干の検証をしたい。そのためには、まず人々が言うように、本当に宗教が乱れている地域で人がたくさん死んだのか、について検証する。

日本人が外国人を見ると「どの国の人か？」とまず気にするように、ネパールの人は相手がどの民族あるいはカーストかということにまず気にする。そのため政府の人口統計でも、どの郡にどのような民族・カーストが住んでいるのかが公表されている（表2）。それぞれの地域で特徴的な傾向を示しており、たとえば首都カトマンズは様々な民族が混在する状況になっており、ブラフマン・カースト（もっとも高いカースト）、ネワール族、チュットリ・カーストが多くを占めていることが分かる。ネワール族とは、ネパールという国名の語源となっている民族で、古くからカトマンズ盆地に住む先住民族である。彼らは小店舗の店主から大業主、輸出入業者、農家、工芸職人と幅広い職に就き、同じ民族の中に高いカーストから低いカーストまで存在し、掃除人から僧侶（ヒンドゥー教および仏教）まで混在している（Bista 2004）。

一方、震源地であるゴルカ郡にはグルン族が多い。グルン族は、世界的に有名なグルカ兵（イギリス軍の正式連隊）を構成する主要民族の一つとして知られており、頑丈かつ勤勉な民族で、モンゴロイド系の顔立ちをしている。シンドゥパルチョコ郡やラスワ郡にはタマン族が多く、首都近

郊のバクタプル郡では、ネワール族が多くなっている。

これらの民族分布を表1の被災状況と重ね合わせてみると、死者被害の多かったシンドゥパルチョコ郡、ラスワ郡、ヌワコト郡、ダディン郡の4郡は、いずれもタマン族がもっとも多い地域であることに気づく。つまり震源地よりも遠方で被害が大きくなっているという現象は、民族の視点から見ると、被害はなぜかタマン族が多く暮らす地域に集中していると言い換えることができる。死者数もそれを裏づけており、Nepali Timesが報告した地震による死者の内訳を見ても、タマン族がもっとも多く亡くなっており、死者の3人に1人がタマン族となっている（図5, Magar 2015）。それは、タマン族は国全体ではたったの5.8%しかないという状況と照らし合わせてみると異常に高い数値と言える。

タマン族とはどのような民族かという点、Bista 2004によると、主にカトマンズを取り囲む高地に住んでいる民族で、典型的なイメージとしては、カトマンズの路上をヘッドストラップで大荷物を抱えて歩いていると紹介されている。男は腰巻をつけ、黒いチュニックを履き、ウールのジャケットを着て、常にククリ・ナイフを携えている。女は綿のサリーとブラウスを着用、簡単な装飾品を身につけている、といったイメージである。彼らは、自分たちはチベットから来たという伝説を持っており、タマンという言葉も、チベット語の「Ta（馬）」「mang（商人）」を意味しているという（Bista 2004）。伝統的には仏教徒として知られているが、一方でキリスト教徒の中で一番数が多いのがタマン族であり（表3）、ネパール内のイメージでは、キリスト教徒といえば、まずタマン族を思い浮かべるのが通常である。

キリスト教徒のタマン族はヒンドゥー教の戒律に縛られないので、牛の肉を食べる。それが多くのヒンドゥー教徒の目には「宗教の乱れ」と写るのだが、それに加えて、タマン族は牛の肉を食べる唯一の仏教徒としても知られている（Holmberg 1996）。ネパールの仏教徒は、通常牛の肉を食べないばかりか、たいていは肉そのものを食べない。

表2 郡ごとの主要民族構成

カトマンズ郡			シンドウパルチョク郡		
順位	主要グループ	人口割合 (%)	順位	主要グループ	人口割合 (%)
1	ブラフマン	23.5	1	タマン族	34.2
2	ネワール族	22.0	2	チェットリ	18.2
3	チェットリ	19.9	3	ネワール族	11.1
4	タマン族	11.0	4	ブラフマン	10.3
ラリトプル郡			バクタプル郡		
順位	主要グループ	人口割合 (%)	順位	主要グループ	人口割合 (%)
1	ネワール族	33.3	1	ネワール族	45.6
2	チェットリ	18.9	2	チェットリ	20.1
3	タマン族	13.1	3	タマン族	14.2
4	ブラフマン	13.0	4	ブラフマン	9.0
ヌワコト郡			ダディン郡		
順位	主要グループ	人口割合 (%)	順位	主要グループ	人口割合 (%)
1	タマン族	42.8	1	タマン族	22.1
2	ブラフマン	19.0	2	ブラフマン	15.0
3	チェットリ	12.6	3	チェットリ	14.7
4	ネワール族	7.4	4	ネワール族	9.4
カブレパランチョク郡			ゴルカ郡		
順位	主要グループ	人口割合 (%)	順位	主要グループ	人口割合 (%)
1	タマン族	34.0	1	グルン族	19.7
2	ブラフマン	21.5	2	ブラフマン	15.2
3	チェットリ	13.7	3	チェットリ	11.6
4	ネワール	13.3	4	マガール族	11.6
ラスワ郡			ドラカ郡		
順位	主要グループ	人口割合 (%)	順位	主要グループ	人口割合 (%)
1	タマン族	68.8	1	チェットリ	33.4
2	ブラフマン	15.1	2	タマン族	16.8
3	グルン族	3.1	3	ネワール族	9.4
4	チェットリ	2.5	4	ブラフマン	9.2

(Population Monograph of Nepal 2014より作成)

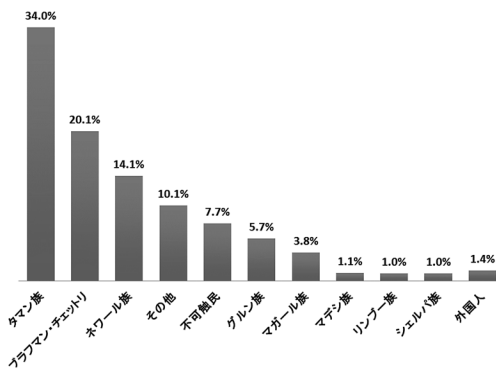


図5 被災死者数の民族・カースト構成 (Nepali Times のデータより作成)

表3 キリスト教を信仰する主な民族

民族/カースト名	全人口 (人)	キリスト教徒 人数, ()内は%
タマン族	1,539,830	54,809 (3.6)
ライ族	620,004	32,907 (5.3)
マガール族	1,887,733	40,904 (2.2)
チェパン族	68,399	17,487 (25.6)
リンブー族	387,300	11,536 (3.0)
サルキ・カースト	374,816	16,300 (4.3)
サントル族	51,735	3,156 (6.1)
タルー族	1,737,470	30,314 (1.7)
カミ・カースト	1,258,554	42,666 (3.4)
チェットリ・カースト	4,398,053	25,807 (0.6)

(Population Monograph of Nepal 2014より作成)

しかし、タマン族だけは古くから牛だけでなく山羊も豚も鳥も食べてきた。それでも、昔は自然死した牛の肉しか食べなかったのだが、2006年にネパールが非宗教国家になってからは、生きた牛を殺して食べるようになったと言われている。ネパールが宗教国家だった頃は、牛を殺して食べることは重罪であり、法によって罰せられていたのだが、世俗国家となってからは、そのような法は廃止されたため、牛を殺して食べる者が現れ始めたという。そのような行為がヒンドゥー教徒たちの怒りを買って、「今回の地震はタマン族を狙ったものだ」という解釈を生む背景となっているようであった。

宗教の乱れという視点からさらにキリスト教に着眼してみると、タマン族は数こそ一番多いが、全民族人口にしめるキリスト教徒の割合で見ると、それほど多いわけではない(表3)。その割合が一番高いのはチェパン族(25.6%)で、実に全民族の4人に1人がキリスト教徒になっている。チェパン族とは、長らく定住をせずに移動を続けて民族であるため、報告資料が少なく、もっとも研究が遅れている民族の一つである。古くからネパールの地に住んでいた先住民であり、つい50年ほど前までは、森を転々と移動して焼畑や狩猟生活をする民族として知られていた。コウモリを狩って食べる文化が有名で、識字率は48.2%と全国平均65.9%を大きく下回っている(Population Monograph of Nepal 2014)。宗教は自然崇拝のアニミズムだが、近年キリスト教徒になる人が急速に増えている。ネパール社会では低い身分として差別され続けており、貧困や飢餓に苦しむ者が多い(チェパン族やタマン族の紹介については、以前の報告(竹下 2009a, b)を参照)。

実はこのチェパン族も、今回の地震では大きな被害を受けた。チェパン族は全民族数が5万人程度と少ないため被害統計ではあまり目立たないのだが、地震のあと子どもたちが深刻な栄養失調に陥っているのは、タマン族とチェパン族であると新聞が報じている(Rathour 2015)。

以上のように、多くの人々が「今回の地震は神からのメッセージ」と解釈する背景には、あたか

も神が狙いをつけたかのように、被害がタマン族やチェパン族に集中してしまっているという現象がある。ただその現象をより科学的に考察してみるならば、宗教以外の要因から合理的に説明することは十分可能である。

表3をつぶさに見てみると、ネパールにおけるキリスト教徒の多くは、タマン族にしてもチェパン族にしても身分が低く、差別を受けてきた民族・カースト(Bennett et al. 2008)であることが読みとれる。キリスト教比率が高いサンタル族、ライ族、サルキ(カースト最下層)も同様で、それら差別を受けてきたグループは、貧困で苦しむ人の割合が高い(Bhattachan 2012, Hall and Patrinos 2012)。そして概してそのような貧困に苦しむ者たちは、崩れやすい急斜面や、土石流に襲われやすい氾濫原などに家を構えている場合が多く、地震による被害をもっとも受けやすい。また家の作りも粗雑で、地震の揺れで容易に倒壊したであろうことも推測できる。さらにはコミュニティ内に病院がないことも多く、本来ならば治せる病気や怪我であっても致命傷になってしまう危険性が高い。このように、タマン族やチェパン族をはじめとするキリスト教徒たちの多くは、他の民族・カーストと比べて大きな社会的ハンディキャップを背負っているため、たとえ同じ揺れの地震が襲ってきたとしても、より大きな被害を受けやすかったであろうことが推測される。そして地震後の救援物資の分配等でも、目に見えぬ差別を受けやすく(The Himalayan Times 2015)、栄養失調などの問題が顕著に現れてくると考えられる。要するに、これは宗教の問題というよりも、貧困や差別の問題と捉えることができる。実際、日本を含めた諸外国はそのような視点から被害を見るであろう。しかし、ネパール国内には「宗教が乱れたせいだ。神の罰だ」と考えている人が多数おり、被害の数字だけ見ると、それを否定することができないので、この宗教的解釈は根強い影響力を持ち続けると予想される。

そこには様々な危険性が内包されている。一つには、ネパール国内のキリスト教徒たちが迫害される危険性がある。今ネパールはキリスト教やイ

スラム教などを容認する動きの中にあるが、それがストップしてしまうことをキリスト教徒たちは心配していた (ex. ACN 2015, Chui 2015)。

そしてそれ以上の大きな動きとして、この年(2015年)秋に予定されていたネパール新憲法の制定に際して、この地震が大きく影響したことが挙げられる。すなわち、2006年以降ネパールはカーストを廃止し、世俗化に向かう政策を進めてきたが、この地震によりそれにブレーキがかかり、宗教国家に戻ろうとする力が働くこととなった。ネパールは国民の81%がヒンドゥー教徒であり、2012年の調査でも、全体の55%が「ネパールをヒンドゥー教国家にするべき」と考えている状況にあった (Sen 2015) が、そのような意見がこの地震によってさらに増加したとみられている。憲法制定にあたっては、ネパールを宗教国家に戻すべきか、世俗国家として進むべきかで大激論が交わされたが、結論としては、世俗国家を強行的に宣言する形で9月20日に新憲法が制定された。

しかし、それに猛反発したのがインド政府で、あくまで非公式ではあるが、ネパールとの国境をブロックし、ガソリンをはじめとする生活必需品をネパールに入れられない措置を執った。それが‘2015 Nepal blockade’ と呼ばれるものである (Ojha 2015, Lee 2015, Arora 2015)。ネパールは独自の港を持っていないため、インドからの物流がブロックされると、生活にもビジネスにもたいへんな支障がきたすこととなった。ただそのような妨害の中にあっても、ネパール国内でインドに対する反対運動やデモ等はそれほど起きなかった。それは、ネパール人の多くがインドの行為に影ながら賛同していることを示していると考えられる。2016年4月現在、街では「近いうちに、ネパールをヒンドゥー教国家に戻すべきか否か、について国民投票が行われるだろう」と噂されている。

宗教的解釈は、このように国の方向性を大きく左右するほどの影響力を持っているのだが、そのことを正しく認識している日本人は少ない。今後、日本の支援の多くは、必然的に被害がもっとも大きかったタマン族やチェパン族コミュニティに向かうと予想される。そのとき、タマン族やチェパ

ン族がおかれている複雑な背景を、日本側が理解しているかどうかで支援の成果はまるで違ったものになるであろうと考えられる。

5. 宗教が高めるレジリアンス

以上、ネパールのような国にあつては、宗教と災害は密接に結びついているのが分かる。日本人は宗教と聞くと、とかく「非科学的」といったような否定的な見解を持ちがちであるが、海外では重要な研究対象の一つに数えられている。それらの報告で多いのは、宗教が持つプラスの効果である。とくに震災からの復興プロセスにおいて、宗教が被災者のレジリアンスを高めているという点が注目されている。

被災された方々の心理には共通点が多く、たとえば地震や津波で大切な子どもを失ってしまった人は、「なぜ自分だけがこんな目に遭わなくてはならないのか?」と苦しみ続けることが多い。あるいは逆に周りのみんなが死んで、自分一人だけが生き残ってしまった場合には、「なぜ私だけ生き残ってしまったのか。あの人の代わりに私が死んだ方がよかったのではないかと自分を責めてしまう人も多い。その苦しみから立ち直ることができないまま、最悪の場合は自殺などへとつながってしまうこともある。

宗教は、このような状況の人たちに立ち直る力を与えることが報告されている。Lawson and Thomas (2007) は、ハリケーン・カトリーナで生き残った人々を調査し、神を信じる心が災害を乗り越えるレジリアンスを与えていると結論づけている。イランの研究では、毒ガス(マスタードガス)を浴びた人たちがどのようにしてその苦しみ乗り越えていったのかを調べ、宗教的な感情がもっとも重要な役割を果たしていることを発見した (Ebadi et al. 2009)。Alawiyah et al. (2011) によると、宗教は「なぜ自分だけ?」という問いに、答えを与えてくれるという。災害とは神が与えてくれたテストだと考えることができるようになり、それを乗り越えるための目的とモチベーションが生まれてくる。苦しみに意味が与えられ、ずたずたになった精神を再び統一し、コントロール

することができるようになってくるという。またソーシャル・キャピタルの視点から見れば、宗教は強力なサポート・ネットワークを作ってくれ、それは復興過程においてとても高いレジリアンスを与えてくれることが分かっている (Lawson and Thomas 2007)。

実際我々が9月に被災地を訪問した際、もっとも驚かされたのは、その立ち直りの早さだった。震災から5ヶ月しかたっていないにもかかわらず、ほとんどすべての被災者が地震を過去のこととし、嘆くことをやめ、新しい未来を築いていこうと前を向いていた。我々のインタビューにも、笑いを交えながら、実に明るく対応してくれた人が多く、恐縮する思いであった。それは驚くべきことで、たとえば東日本大震災の経験からすると、被災で家族を失った人々がその当時のことを語るようになってきたのは、ようやく1年を過ぎたあたりからだった。しかも、最初はぼつぼつと単語をつなぐことしかできず、家族を失った事実を受け入れるのには、何年もの月日を要するようであった。

ところがネパールでは、そのように沈んだ空気はまったく感じられなかった。グルカでインタビューをしたマガール族30代の男性(図6)は、



図6 マガール族の被災男性(筆者撮影)

1才の子どもが家の下敷きになって死んでしまったというのに、実にさばさばと当時のことを振り返って話してくれ、悲しみにうちひしがれている様子はまったくなかった。それどころか、「今一番の悩みは何ですか?」と訊ねると、「農作物を干す倉庫が地震で壊れてしまったので、どこに収穫物を干したらいいかで困っている」と実に現実的な回答だったのが印象的であった。

日本では、震災から6年目を迎えようとしているが、復興にはまだまだ時間を要すると思われる。一方ネパールは、たった5ヶ月でもう震災の痕跡が消えつつあった。このネパールのレジリアンスの強さに、宗教が大きく寄与していることはほぼ間違いないと我々は感じている。たとえば日本で避難所と言え、だいたい小学校や中学校が使われることが多いが、ネパールの場合その役目を果たしていたのは、寺院だった。寺院に避難した被災者たちは、そこで毎日僧侶からプランと呼ばれる宗教講話を聞くことになる。それが、家族を亡くした人たちに落ち着きを与え、心を癒やす効果を生んでいるように見受けられた。これらの宗教とレジリアンスの関係については、現在ネパールで詳細な世帯調査を行っているので、近いうちに報告したい。

世界では、このような宗教の重要性に気づき始めた国は多い。たとえばカナダでは、防災計画を策定する際に、先住民族であるファースト・ネーション(かつてインディアンと呼ばれていた人々)の宗教観やアプローチを取り入れる試みをすでに始めている (Kirmayer et al. 2009)。今後の災害対策においては、従来の科学的アプローチに加え、宗教的な視点も取り入れていくことで、これまで十分な対応が難しかった「人々の心の問題」などについても、より包括的なアプローチができるようになるのではないかと期待される。

謝辞

本研究は日本学術振興会科研費(JSPS 25540157)「政府・自治体が先回り災害対策を講じるための時系列災害情報作成と物語アーカイブ化」の助成を受けている。

参考文献

- ACN: Hindu radicals in Nepal 'warn all foreign Christian religious leaders to leave this country, Aid to the Church in Need, 10/07/2015, http://www.churchinneed.org/site/News2?ppag=NewsArticle&id=8697&news_iv_ctrl=1, 2015.
- Alawiyah, T., H. Bell, L. Pyle and R. C. Runnels: Spirituality and Faith-Based Interventions: Pathways to Disaster Resilience for African American Hurricane Katrina Survivors, *Journal of Religion & Spirituality in Social Work: Social Thought*, Vol.30, No.3, pp.294-319, 2011.
- Arora V.: R.I.P., India's Influence in Nepal. India will pay a diplomatic price for its reaction to Nepal's new constitution. *The Diplomat*. November 25, 2015.
- Bhattachan K. B.: Country Technical Notes on Indigenous Peoples' Issues Federal Democratic Republic of Nepal, The International Fund for Agricultural Development (IFAD), 2012.
- Bennett L., D. R. Dahal and P. Govindasamy: Caste, Ethnic and Regional Identity in Nepal Further Analysis of the 2006 Nepal Demographic and Health Survey. USAID, 2008.
- Bista D. B.: People of Nepal. Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu, Nepal, 2004.
- Carvalho N.: Hindu leader blames Nepal earthquake on eating beef. *AsiaNews.It*. 04/28/2015, 2015.
- Christianity Today: Nepal Earthquake Collapses Churches during Weekly Worship Services, <http://www.christianitytoday.com/gleanings/2015/april/nepal-earthquake-dashes-christians-hopes-constitution.html>, 2015.
- Chui A.: Nepal earthquake deals a blow to Christians looking for improvement to country's religious freedom situation. *World*, 04/29/2015, <http://www.christiantoday.com/article/nepal-earthquake.deals.a.blow.to.christians.looking.for.improvement.to.countrys.religious.freedom.situation/53000.htm>, 2015.
- Ebadi A., F. Ahmadi, M. Ghanei and A. Kazemnejad: Spirituality: A Key Factor in Coping among Iranians Chronically Affected by Mustard Gas in the Disaster of War, *Nursing & Health Sciences*, Vol.11, No.4, pp.344-50, 2009.
- Hall G. H. and H. A. Patrinos: Indigenous Peoples, Poverty, and Development, Cambridge University Press, New York, 2012.
- Holmberg D. H.: Order in Paradox. Myth and Ritual Among Nepal's Tamang, Cornell University Press, New Delhi, pp.22-30, 1996.
- Kirmayer L. J., M. Sehdev, R. Whitley, S. F. Dandeneau and C. Isaac: Community Resilience: Models, Metaphors and Measures, *International Journal of Indigenous Health*, Vol.5, No.1, pp.62-117, 2009.
- Lawson E. J. and C. Thomas: Wading in the Waters: Spirituality and Older Black Katrina Survivors. *Journal of Health Care for the Poor and Underserved*. Vol.18, pp.341-54, 2007.
- Lee M.: Church Attendance Plunges after Nepal Becomes a Secular State. *Cleanings*, 11/6/2015, 2015.
- Magar S. G.: The Tamang epicenter. *Nepali Times*, <http://nepalitimes.com/article/nation/April-25-earthquake-Tamang-epicentre>, 2407, 2015.
- Munchies staff: An Indian Politician Blames Beef for the Nepal Earthquake. *MUNCHIES*, 04/29/2015, 2015.
- Ojha H.: The India-Nepal Crisis. After two devastating earthquakes, a blockade on its border presents Nepal with another humanitarian crisis, *The Diplomat*. November 27, 2015, 2015.
- OSOCC: Nepal Earthquake. District Profile-Sindhupalchok, 08.05.2015, http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/150508_sindhupalchok_osocc_district_profile_-_for_publishing.pdf, 2015.
- Population Monograph of Nepal 2014. Central Bureau of Statistics, Government of Nepal, 2014.
- Plis, I.: Nepal's Devastating Earthquake Was Punishment for Eating Beef, Say Politicians, *The Daily Caller*, 04/27/2015, 2015.
- Rathour H. S.: Malnutrition stalks quake-hit Nepali kids, *The Kathmandu Post*, 30/07/2015, 2015.
- Sen P. K.: Should Nepal be a Hindu state or a secular state? *Himalaya, the Journal of the Association for Nepal and Himalayan Studies*, Vol.35, pp.65-90, 2015.
- The Himalayan Times: Chepang quake victims in a lurch, *The Himalayan Times*, 12/08/2015, 2015.
- UNHCR: Nepal: 2015 Earthquakes, <http://data.unhcr.org/nepal/>, 2015.
- U.S. Department of State: Background Notes: South

Asia, May, 2011, InfoStrategist.com, 2011.
外務省：インド基礎データ, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/india/data.html>, 2016.
竹下正哲：識字修得と二分心消失－ネパール・ラウテ族, チェパン族を事例として, 現代と文化, 日本福祉大学福祉社会開発研究所, Vol.119, pp.31-54, 2009a.

竹下正哲：テキスト化によって失われた無意識の世界, ネパール・文字を拒んだ民族, アリーナ, 風媒社, Vol.6, pp.260-269, 2009b.

(投稿受理：平成28年1月10日
訂正稿受理：平成28年11月7日)

要 旨

2015年4月25日ネパールにて巨大地震が発生した。この地震の特異な点は、被害が震源地よりも遠方で大きくなったという現象にある。その原因は今後科学的な視点から解明されていくと考えられるが、ネパールでは、それを「神からのメッセージ」と解釈している人が多数いた。日本のような国では、そのような宗教的解釈は非科学的と一笑に付されるが、現地では真剣に議論されていた。ネパールのような宗教国家では、ときに宗教が国の政策を左右するほどの影響力を持つ。今後被災地には多くの国際機関が援助に入っていくことになるが、現地での無用な衝突を避けるためにも、宗教的解釈を理解しておくことは重要と考える。本報告の目的は、現地の宗教的解釈を報告し、それを分析することにある。